中高生とともに差別と闘う

『ふるさとはどこですか？』

吉成タダシ

ふるさとはどこですか？

「追伸　前に帰省した時に、六歳になる甥っ子に聞かれました。「○○ちゃんのふるさとはどこ？」って。私は「ここよ。ここのお家がふるさとよ」と答えました。私が、「O君のふるさとはどこかな？」と聞いてみました。すると甥っ子は、「お母さんのお腹の中」と答えました。私はなんてかわいらしいことを言うのだろうと思い、このことをその場にはいなかった甥っ子の父親である私の弟に話しました。そうすると私が想像していた答えとはかけ離れた言葉が返ってきました。「最近の教育や」と。私はショックでした。「ふるさとも言えないの？」と思いました。よくはわからないけど、部落問題が水面下に沈んでいきそうで。そうならないためにも、部落問題が学校だけの授業で終わらず、生涯学習として取り組まれていかなければいけないとつくづく思いました。私は甥っ子のためにも、目をそらさず生涯勉強していきたいと思います。差別に負けない、そして自分も差別することがないように、今までも。これからも」

同じような意味なのに、敢えてカタカナ言葉に置き換えることってありますよね。「どうして分かりやすく日本語で言わないの？」と思ってしまいます。

「お母さんのお腹の中」も、確かに間違いではありません。でもそれはどこか、「まやかし」のようにも聞こえます。言いにくいことを、耳障りの良い言葉に置き換えて新鮮味を感じさせ、事の本質をはぐらかしているように思うのです。人それぞれに、いろんな解釈の「ふるさと」があっていいと思います。ということは、社会的に差別の対象とされる「ふるさと」も当たり前に認められ、堂々と言えていいはずです。そんな社会に変えていくのが、あなたであり私であれたらと思います。

「これまで」あっての「これから」

彼女から届いた追跡調査の文面はここまでです。これ以外にも、考えさせられるような回答はたくさんありました。それは言い換えれば、これまでの同和教育・人権教育がどうであったのかを客観的に見つめ直すということに他なりませんでした。学生時代に学んだ人権学習の善し悪しについての総括は、在学中では判断できないのではないかと思います。学生という立場を卒業し、社会に出て初めて、当時の学習の何が良くて何が悪かったのか、どこをどんなふうに改善していけばいいのかが分かるのではないかと思うのです。つまり、「これから」の人権教育の道筋を明確にしていくためには、「これまで」の同和教育・人権教育を客観的に検証しておく必要があるのではないかと思うのです。

二〇一六年十二月、「部落差別解消推進法」が施行されました。これは部落差別の存在を国が認めたうえで、解消に向けた責務が国及び地方公共団体にあることを明記した点において画期的であるといえます。罰則規定はなく、理念法であるというもどかしさはありますが、それでも相談体制の充実や教育及び啓発、実態調査の必要性について言及しており、部落差別に歯止めをかけるばかりではなく、活用次第では大きなよりどころになるといえるでしょう。

他にも同年には、「障害者差別解消法」や「ヘイトスピーチ解消法」といった、人権に関する重要な法律も施行されました。そのどれもが、「絵に描いた餅」にならないよう、実効性のある取組にしていかねばなりません。

「寝た子を起こすな」論

元教え子たちに行った、中学生当時の人権学習についての追跡調査。もう一つだけ紹介したいと思います。

中学校入学と同時に県外から転入し、小学校からの積み重ねがなかった男の子の回答です。当時の部落問題学習や自分をふりかえったうえで、今を生きている自分について、率直に述べてくれました。

「おはようございます。僕の率直な意見を送りますね。

僕は埼玉県から引っ越してきて中学校に入学しました。部落問題なんて全く知らなかったんです。周りのみんなは知ってました。小学校から問題が顕在化し取り組まれてたのでしょうね。

僕ね、知らなかった方が良かったって当時思ってました。わざわざ知ることないんじゃないかな？知ったが故に違和感持ったり、そんなつもりないねんけど何かギクシャクしてしまったり、態度では表せへんねんけど、心の中では「可哀想」と勝手に思ったり…。知らなかったら今まで通り普通に過ごせるのに…って」

社会に根強く残る、「寝た子を起こすな」論。「学校が知らせるからいつまでも部落差別がなくならない」「そっとしておけば自然になくなる」といった、「寝ている子をわざわざ起こさなくても良いではないか」といった論理です。果たして正しい道理でしょうか。百歩譲って、知らないまま人生を過ごせるならば、それはそれでありかもしれません。しかし、長い人生の中で知らずに過ごせるという確証はあるでしょうか。もしマイナスイメージが入ってきたときに、「それっておかしくない？」とはっきりと言い切れるでしょうか。知らないからこそ、誤った思考に陥る。つまり、「無知が差別を生む」ということは、往々にしてあるように思うのです。社会には、部落差別に限らず、様々な差別問題があります。私たちがしているのは、それらに対しての予防教育でないかと思うのです。

彼の回答は続いていきます。

（次回「『感動』で心に響いてるから」）

イラスト　中島　亜唯